

## 東ドイツ体制批判運動の拡大：「開かれた活動」の展開を中心に

村上，悠  
九州大学大学院法学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1832049>

---

出版情報：政治研究. 63, pp.69-97, 2016-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン：  
権利関係：

# 東ドイツ体制批判運動の拡大

——「開かれた活動」の展開を中心に——

村上悠

はじめに

第一章 「開かれた活動」の成立

第二章 「開かれた活動」の展開

第三章 「開かれた活動」から「下からの教会」へ

おわりに

## はじめに

ドイツ民主共和国（以下東ドイツ）はかつて存在した「全体主義国家」としてドイツにとって克服されるべき過去として扱われることがある。しかしながら、単純に東ドイツを「全体主義国家」とみなし、ナチス・ドイツと同列に扱うことは、ナチス・ドイツを相対化し、同時に、かつて存在した社会主義国家の歴史的意義と可能性についての議論を封殺しかねないものである。<sup>(1)</sup> その歴史的意義と可能性について論じるためにも、「全体主義国家」とされる、東ドイツの社会そのものの歴史的な実態分析を通じてナチス・ドイツとの区別を行っていく必要がある。<sup>(2)</sup> その際、本稿で注目したいのが、東ドイツにおける体制批判運動である。

そもそも東ドイツの体制批判運動については、一九八九年秋の大規模な民主化要求のデモがベルリンの壁の開放に影響を与えたことから、この時期の運動が主要な関心の対象になってきた。<sup>(3)</sup> しかし、この運動に参加していた経歴を持つ、エールハルト・ノイベルトの研究により一九八九年以前にも、支配政党である社会主義統一党 (Sozialistische Einheitspartei Deutschlands : 以下SED) への批判運動が様々な形で存在していたことが明らかにされている。<sup>(4)</sup> すなわち東ドイツの体制批判運動もまた、小規模ではあるが歴史的な背景を有し、東ドイツ社会に存在し続けてきたのである。よって東ドイツの体制批判運動の歴史的な展開を扱うこともまた、東ドイツの実態分析の一助となるといえる。

先に挙げたノイベルトの研究は、東ドイツの体制批判運動が歴史的に存在したことを明らかにしているが、それぞれの存在を並列的に論じているため、個々の運動の関係性が十分に論証されていない。そのため、運動の歴史的な連続性の観点からの分析もまた必要であると考えられる。日本における東ドイツの体制批判運動研究は、一九八九年の転換期において教会、特に福音教会が体制批判運動の拠点として機能していたことから教会との関係の中で論じられてきた。日本における東ドイツ体制批判運動研究の基礎を形成したと考えられる山田徹氏の研究においては教会と結びついた「新しい活動」として一九七〇年代末からの平和運動からの連続性が述べられている。<sup>(5)</sup> また、市川ひろみ氏の研究は東ドイツの教会が「社会主義の中の教会」としての自己規定のもと、SED体制との協調関係を形成する一方で、内部に

体制批判運動グループを生み出すことになる過程を描き出している。<sup>(6)</sup>さらに、東ドイツにおける「六八年世代」と一九八九年の運動との関係について論じた井関正久氏の研究においても一九七八年に教会の社会的地位が保障されるようになった後、教会が様々な体制批判運動の拠点となっていたことが指摘されている。<sup>(7)</sup>しかし、これらの研究において、教会が受け入れる「場」として体制批判運動の拠点であったことは一致しているものの、教会側にこうした運動を受け入れる「アクター」が存在していたかどうかについては議論していない。

ノイベルトの研究においてこうした教会側の「アクター」として示されているのは「開かれた活動 (Offene Arbeit)」と「下からの教会 (Kirche von Unten)」である。ノイベルトの研究では、教会内部において「開かれた活動」が東ドイツにおいて「墮落的」と見なされていた西側の文化の影響を受けていた若者たちを保護し、多様な社会的問題を取り扱い、多くの体制批判運動の母体になったとされている。<sup>(8)</sup>「開かれた活動」の主要な主催者へのインタビューを通じて「開かれた活動」の実態をより具体的に明らかにすることを試みたアンネ・シュティープリッツは、「開かれた活動」の特徴の一つに、制限を受けることなくグループ化を行うことができる空間を創出したことを挙げている。<sup>(9)</sup>一方、「下からの教会」についてはノイベルトの研究において一九八七年にベルリンで成立し、一九八九年の転換期においてもこのとき出現した市民運動グループの支援を行っていたことが示されている。<sup>(10)</sup>ノイベルトの研究によると、「開かれた活動」は一九六〇年代末にチューリンゲン地方において、ヴァルター・シリング (Walter Schilling) という人物により開始されたことが指摘されている。<sup>(11)</sup>このチューリンゲン地方に焦点を絞り、この地方における体制批判運動の展開を扱ったノイベルトとトーマス・アウエルバッハの研究においても、一九七〇年代末から一九八〇年代にかけてチューリンゲン地方の各市で展開された運動の多くが「開かれた活動」と結びついているものであることが示されている。<sup>(12)</sup>ノイベルトの研究が運動の存在を包括的に示す一方で、ヘニング・ピーチは「開かれた活動」内の運動のうち、イエナ (Jena) において展開された「ユング・ゲマインデ・シュタットミッテ (Junge Gemeinde Stadtmitte) (以下ユング・ゲマインデとのみ表記する場合はこのイエナのユング・ゲマインデを指す)」の展開を詳細に検討している。<sup>(13)</sup>そして、「開かれた活動」により形成された東ドイツ全体にわたるネットワークの存在を示したうえで、東ドイツにおける「開かれた活動」の内の

「ユング・ゲマインデ」の重要性を指摘している。<sup>14)</sup> ピーチの研究は一九七〇年から一九八九年に至るまで教会内部の運動が連続性を持って存在していたことを示しており本稿の問題関心と合致するものである。しかしながら、検討の対象をイエナにおける運動に限定し、対象も「開かれた活動」内の一運動である「ユング・ゲマインデ」に限定しているため、他の地域で成立した運動との関係が十分に説明できていない。また東ドイツ体制批判運動研究においても、チューリンゲン地方から発生し、一九八九年に至るまでの「開かれた活動」の連続性について分析した研究は、管見の限り見当たらない。<sup>15)</sup>

以上の研究状況を踏まえた上で、本稿では「開かれた活動」に注目し、一九六〇年代末に成立し、一九八九年に至るまでに東ドイツ各地に拡散し、同時に運動の内部で多様な体制批判運動が形成されていく過程を明らかにしていく。その際、運動の当事者へのインタビュー並びに、東ドイツの体制批判運動に関連する史料が集積されている、マティアス・ドマーシユク・チューリンゲン現代史文書館 (Thüringer Archiv für Zeitgeschichte „Matthias Domaschk“) 及び「開かれた活動」が成立したチューリンゲン地方、特に東ドイツ時代の行政区分で、イエナが属していたゲラ県 (Bezirk Gera) の行政文書が保管されているルードルシュタット・チューリンゲン州立文書館 (Thüringisches Staatsarchiv Rudolstadt) の史料を利用することにした。

以下は本稿の構成である。まず、第一章において「開かれた活動」が成立するにいたった経緯を教会の活動と、活動の主な参加層であった若者世代の動きを中心に論じる。次に第二章においては「開かれた活動」内でどのような活動が行われていたのかについて「ユング・ゲマインデ」を例にとって説明する。次いでこうした「開かれた活動」に対して体制側からはどのような評価がなされていたのか、そして、この運動に対する弾圧の結果、地域的に拡大し、内部に明確な体制批判運動を取り込んでいく過程を検証する。最後に第三章においては、まず、東ドイツ各地に拡散した「開かれた活動」とそのネットワークにより展開された運動について説明したうえで、体制側との摩擦を恐れる教会指導部と「開かれた活動」の軋轢、そこから「開かれた活動」の流れをくみ、体制批判運動を支援する「下からの教会」の成立過程を検討する。以上の検証を踏まえて東ドイツの体制批判運動の拡大過程の特徴を整理する。

## 第一章 「開かれた活動」の成立

建国当初から東ドイツにおいてキリスト教は排除されるべきブルジョア文化の一部であるとして弾圧の対象であった。そのため、SED書記長ヴァルター・ウルブリヒト (Walter Ulbricht) の政権下において、東ドイツ教会に対しては様々な圧力が加えられることとなった。たとえば、一九五〇年代においては一四歳に達した男女への国の式典である「成年式」を巡り、教会との軋轢を生んだ<sup>(15)</sup>。また、一九五〇年代半ばまでに政府に対して非協力的な七十名前後の聖職者が逮捕され、キリスト教徒であることを告白した者は主要な役職から追放された。とりわけ、政府は若者が教会へと接近することに対して警戒感を示しており、「青年共同体 (Junge Gemeinde)」に対して圧力を加える他、学業の面でも冷遇され、学生であっても退学処分を受ける場合によっては逮捕されることすらあった<sup>(16)</sup>。

東ドイツにおける教会組織としては一九四八年に東西ドイツ共通の組織である「ドイツ福音主義教会 (Evangelische Kirche in Deutschland : 以下EKD)」が成立しており、東ドイツのプロテスタント教会はこの一部であった。一九六一年にはベルリンにおいて全ドイツ合同の教会大会が開催され、東ドイツの状況が報告されるなど東西の問題を共有する場として機能していた。しかし、ベルリンの壁の建設によりそうした活動は困難になった。さらに、一九六八年に東ドイツ憲法が改正され東西間の教会の協力が法的に不可能になり、東ドイツのプロテスタント教会は西ドイツとの協働を断念せざるを得なくなった。この翌年、一九六九年には「ドイツ民主共和国福音教会連盟 (Bund der Evangelischen Kirche in der DDR)」が結成されることとなり、EKDから正式に分離することとなった<sup>(17)</sup>。

教会内において最初に反対派が形成されたのは良心的兵役拒否の問題を巡ったことであった。一九六一年、緊急時の国民の動員に関する国防法が制定され、この翌年には兵役義務の導入が決定された。これに対して教会は西ドイツの良心的兵役拒否制度を念頭に、教会の立場を、信仰と良心を根拠として兵役拒否を合法的に支援することを義務として担うことを宣言している。このことに対して、東ドイツ政府は妥協案として非戦闘任務に従事する「建設兵士」制度の導入を行った。しかしながらこの制度も教会側の要求を満たし得るものではなく、なおも教会側の批判は続けられた。

しかし、一九六六年以降東ドイツ政府により教会の兵役拒否運動に圧力が加えられるようになると、教会指導部は自分たちの兵役拒否支援活動は東ドイツの政策を批判するものではないとする声明を発表し方針転換を行うこととなった。ただし、各教区レベルでは牧師等が、体制批判的な姿勢からの兵役拒否者の保護活動を継続する傾向にあったとされている。また、「建設兵士」経験者たちもこうした教会の運動に参加していくこととなった。<sup>20)</sup>

以上のように東ドイツの教会は建国以来国家からの圧力を受け、政府と対立する場面も見られた。特に良心的兵役拒否の問題を巡っては、各教区の牧師などを中心に政府の方針を批判する姿勢を示した。その後、教会指導部は政府への批判の意図がないことを表明するが、この一方で下部においては政府批判が継続されるなど分裂する対応が見られていた。

次に「開かれた活動」の中心的な参加者層となった一九六〇年代の若者世代の動きについて検討していくこととする。一九六〇年代にはジャズ等の音楽を中心として西側の文化が流入してきており、若者を中心に影響を与えていた。こうした西側文化は「墮落的」であると思われ、抑圧の対象となった。一九六五年ライプツィヒ (Leipzig) では、音楽活動の許可証をめぐる問題から若者が政府批判活動を展開する事もあった。<sup>21)</sup>そして、一九六五年一二月の中央委員会決定によって西側の文化への厳しい制限がかけられるようになった。<sup>22)</sup>この中央委員会決定への反発から各地で若者の読書グループが形成され、若者の中で体制批判的な活動を行う者が増加し始めた。<sup>23)</sup>

そして、一九六八年の「プラハの春」が始まると東ドイツ各地で「敵対行動」が発生するようになった。学生による批判活動が活発化し、三月にはベルリンで学生グループによる体制批判的な壁新聞が作成されている。そして、八月二一日の軍事介入が始まると、ソ連大使館前での抗議活動や、体制批判的な内容のビラを撒くといった行動が学生によってとられている。また、エアフルト (Erfurt) では抗議デモの試みがおよそ二百人の若者によってなされているが、警察によって解散させられ逮捕者も出ている。<sup>24)</sup> 国家保安省 (Ministerium für Staatssicherheit) によると、八月二一日から一月末までで約二千件の体制批判的な行動が報告されており、容疑者として一二九〇人が捜査対象となっている。さらに容疑者の大半が二五歳未満であり、うち七割が労働者であったとされる。<sup>25)</sup> 「プラハの春」弾圧に対する若者を中心と

した抗議活動は最終的にほぼすべて鎮圧され、この当時多く開かれていた若者たちの読書グループもそのほとんどが解散させられることとなった。ただ、一九六五年から一九六八年の過程を通じ体制批判運動を展開した経験のある若者の層が形成されることとなったのである。

こうした状況下で若者の受け皿となったのが「開かれた活動」であった。すでに述べたようにこの「開かれた活動」を最初に開始したのがヴァルター・シリングであった。シリングは、一九五〇年代後半よりイエナを拠点として若手牧師の仲間と協力して活動を行っていた。シリングはイエナ近郊のルードルシュタット (Rudolstadt) で教会活動の一環としておよそ二百人の若者の支援を行っていた。<sup>(26)</sup>そして、シリングは一九六八年よりそうした若者をルードルシュタット近郊の小村ブラウンスドルフ (Braunsdorf) に集め、ここを拠点として集会を開催するようになった。シリングは一九六八年に運動を開始した経緯について次のように述べている。<sup>(27)</sup>

「開かれた活動と今日呼ばれるものは六〇年代末期に発生しました。(……)西ベルリンの学生たちが彼らの意志を発言することを試みようとしていた一方で、こちら側で自分の言葉で意思を表明できる者はほとんどいませんでした。あちらこちらで核兵器反対のマークやチェ・ゲバラのプラカードが出現しました。しかし東ドイツの若者たちは、自分たちが何とかして別のものになりたいということを求めているにすぎないということを正確には理解していなかったのです。そうしたことは大人たちによって固く拒絶されていたからです。

そして多くの若者たちが教会の空間へとやってきました。こうしたことは、教会の空間が開いていることが問題 (Problem) とされた場合、多くの村や都市で起こりました。ですが、ほとんどの場合、こうした空間は一樣には開かれているわけではありませんでした。

ある私の若い友人が私に『ヴァルター、私たちは再び自分たちの音楽を聴きたいのだ。だが同時に駅前で演奏していたときのように、警察に追われることは避けたいのだ。』と言ってきました。私はそこで当時の教会の管理者のところへと向かいました。彼は『わかりましたが、それは教会や福音と関わりあるものなのでしょうか。』『いいや、彼らは彼等

の音楽を聴きたいのだ。』その後、私は彼を納得させることができました。そうして若者たちの空間の中で友好的なもののやその他の様々なものをもなった何かが始まったのです。」

このシリングの発言は「開かれた活動」が開始された時期の若者たちの状況と教会側の姿勢を示している点で興味深いものである。東ドイツの若者の状況に関するシリングの発言によるならば、一九六〇年代末期の若者たちは、何らかの飛躍を求めており、教会の空間を指すこととなった。しかしながら、当時教会は「開かれている」といわれられても、全ての人に対して開いているわけではなかったのであった。そうした状況でシリングは、教会とは関係のない若者たちのために教会の空間を開放する事を始めたのである。これが「開かれた活動」の端緒であった。

そしてシリングは、ブラウンズドルフの教会施設を、若者の集会所として活用できるようにした。ブラウンズドルフはすぐに、体制に批判的な、社会に順応できない若者たちの集会所として機能するようになり、教会のミサなどに合わせて音楽集会などが開催されるようになった。こうした集会にはおよそ百人前後が参加し、参加者の年齢はおよそ一四から一七歳であった。<sup>(28)</sup>さらにシリングの運動の情報は教会を通して東ドイツ各地へと伝わり、近隣のザールフェルト(Saalfeld)、ルードルシュタット、イェナをはじめとしてライプツィヒやドレスデン(Dresden)、ベルリンからも学生が集まってくるようになっていた。<sup>(29)</sup>シリングはこうした学生たちとの交流を通じて各地の青年グループとコンタクトを取るようになっていった。

シリングの活動は、一九七〇年にエアフルトにおいて開催された福音教会の教会大会においても展開された。これは、シリング達の活動がさらに注目されるきっかけとなった。<sup>(30)</sup>ただ、このときはまだ「開かれた活動」という呼称は使用されてはおらず、この名称はのちに一九七一年に当時ライプツィヒの牧師であったクラウス・ユルゲン・ヴィジズラー(Claus-Jürgen Wizisla)によって名づけられた。<sup>(31)</sup>

以上のような経緯で「開かれた活動」は、若者の活動空間の提供という基本的な形態を確立し、展開していくことになったのである。

## 第二章 「開かれた活動」の展開

一九六九年に入ると、東ドイツは非常に強硬であった文化政策を緩和することとなる。一九六五年の中央委員会決定以降東ドイツ政府は文化統制をSEDの青年部であった自由青年同盟(Freie Deutsche Jugend: 以下FDJ)を通じて行ってきたのだが、このころになるとジャズなどの文化はFDJの内部でも評価され、愛好されるようになっていた。そのため完全な抑制が実質的に不可能になっていったということがこの文化政策緩和の一因となっていたとされる。<sup>(32)</sup>

また、一九七一年にBEKの指導者アルブレヒト・シェーンヘル(Albrecht Schönherr)により「社会主義の中の教会」が提唱され、これによって教会内部の行動に直接的な圧力がかけられることが少なくなった。<sup>(33)</sup>このような背景のもと「開かれた活動」はその運動を展開していくこととなるのである。

ヴァルター・シリングは一九六八年にブラウンズドルフにおいて活動を開始して以来、各地の青年グループと連携しており、その活動方式は拡散していった。シリングの活動は一九七一年までにはザールフェルト、ツェラーメーリス(Zella-Mehlis)、イエナ、ライプツィヒへと伝えられた。<sup>(34)</sup>そして、その中でも特に大きなグループへと発展していったのがイエナのユンゲ・ゲマインデであった。当時、イエナは中規模都市ではあるが、伝統的な大学都市であったことに加え、東ドイツ有数の国营企業であるカール・ツァイス(Carl Zeiss)の本拠地が置かれていたこともあり、学生や労働者を中心として多くの若者が生活する都市であった。

イエナにおいては当時神学生であったウーヴェ・コッホ(Uwe Koch)を中心とするユンゲ・ゲマインデという学生グループが結成されていた。コッホは一九六六年ごろからバンドグループを結成しており演奏活動を行っていた。彼は一九六八年から「建設兵士」として従軍しており、この期間中に「プラハの春」への軍事介入と弾圧が発生している。コッホはこの一連の出来事について「ワルシャワ条約機構軍のチェコ・スロバキアへの進駐は私にとって容認できるものではなかった。」と述べている。<sup>(35)</sup>

このコッホたちのグループは、一九七一年以降、助祭であるトーマス・アウエルバッハ(Thomas Auerbach)を監督

者として教会内で活動を展開していくこととなった。このユンゲ・ゲマインデには後に「開かれた活動」の主催者へと転じる人物も参加しており、先述のコツホ自身が後にルードルシュタットの「開かれた活動」の中心人物となっている。また、シリングもまたイエナをたびたび訪れており、このユンゲ・ゲマインデを通じて交友関係を形成している。他にもゲラのヴォルフガング・タールマン (Wolfgang Thalmann)、『トーマス・ノイバウアー (Thomas Neubaier) 等が参加しており、シリングやアウエルバッハラと交友関係を築き、彼らの個人的なネットワークが形成されることとなった。<sup>(36)</sup>

ユンゲ・ゲマインデでの活動としてはまず、若者たちの討論会が開催されていたが、その議題は社会的、政治的問題を通じて決定され、夕べの会において話し合われたとされている。ここで取り上げられた議題は、兵役問題や平和問題、社会の公正、公平といった大きな問題から企業における力関係や労働環境に至るまで多岐にわたるものであったといわれている。<sup>(37)</sup> また、読書会や音楽集会、演劇会等も開催されており、西側の音楽が好んで演奏されていたようである。こうした音楽に対して何を求めていたかについて、コツホはインタビューにおいて次のように述べている。<sup>(38)</sup>

「西側、自由、抵抗、反発です。それが〔音楽をテーマとする〕四つの理由でした。音楽によって私は精神的に壁を飛び越えることが出来たのです。ポップ・ディランやジョン・メイオール、ローリング・ストーンズ、レッド・ツェッペリンを聞くことができるのに、どうして東ドイツの歌を聞かなければならないのでしょうか。東ドイツの歌は無味乾燥で何の慰めにもならなかった。」〔括弧内は引用者〕

つまり、「開かれた活動」の参加者は、彼らの音楽に、西側世界への憧れと同時に、四つの理由に挙げられているように体制に対する抵抗の意志も見出していたことになる。このように「開かれた活動」に際して、音楽を通じて体制批判的な意識に触れることが可能であったのである。また、こうした音楽集会や演劇会は他の地域の「開かれた活動」と共同で行われることがあり、一例としてはイエナとゲラの共同での演劇会が開催されている。こうした共同での集会を通

じて参加者間でも交友関係が築かれることとなった。<sup>(39)</sup>

ユング・ゲマインデのもう一つの役割は、東ドイツにおいて否定的に扱われていた、あるいは出版が禁止されていた書籍を読むことが可能な場所を提供するということにあった。教会においては当時、東ドイツでは否定的な扱いを受けている書籍が教会内に限るという制限のもとで所蔵されており、読むことが可能であった。一例としてはギュンター・グラス (Günter Grass)、『シユテファン・ハイム (Stefan Heym)』、『アレクサンダー・ソルジェニーツィン (Aleksandr Solzhenitsyn)』や『ジョージ・オーウェル (George Orwell)』などが挙げられる。<sup>(40)</sup>

また、このようなイエナの教会における活動には東ドイツの作家グループ (Arbeitskreises Literatur) も参加していた。このグループはイエナのノイローベダ (Neulobeda) 地区を拠点として、一九七三年より詩の朗読会等を開催していたとされている。ここでは、自国の作品のみならず、海外の作品についての議論も行っていたということである。このグループには、『ユルゲン・フックス (Jurgen Fuchs)』、『ルッツ・ラーテノウ (Lutz Rathenow)』、『ジビレ・ハーヴェマン (Sibylle Havemann)』といった人物が参加していた。<sup>(41)</sup>

さらに、こうした教会内部での運動には東ドイツの体制に批判的な知識人も参加していた。代表的な人物としてはロベルト・ハーヴェマン (Robert Havemann) とヴォルフ・ビアマン (Wolf Biermann) の二名が挙げられる。ロベルト・ハーヴェマンは上述のジビレ・ハーヴェマンの父親であり、代表的な体制批判的知識人であった。ハーヴェマンはイエナの運動に参加する事で、この地域の平和運動グループと緊密な関係を持っており、この関係は一九七〇年代の後半から展開されることとなる自律的な平和運動の中で影響力を持つこととなる。一方のヴォルフ・ビアマンもまた東ドイツの代表的な体制批判的知識人であり、一九六〇年代初頭から詩の朗読会などを通じて体制批判活動を行っていた。しかし、一九六五年以降の文化統制の際に、東ドイツ国内における作品の発表を禁じられることとなる。ビアマンの作品は一九六八年の『プラハの春』弾圧への抗議活動を行った若者世代からは大きな支持を集めていた。<sup>(42)</sup> また、ビアマンは東ドイツ国内での作品の発表は禁じられていたものの、度々西ドイツにおいて作品を発表しており、そのテープが東ドイツに持ち込まれ、教会内で聞くことが可能であった。そしてビアマンは教会内の運動の中で大きな支持を

獲得していくこととなったのである。<sup>(44)</sup>

このように、「開かれた活動」が展開された教会の内部では体制側が提示するイデオロギーとは異なる文化に自由に触れることのできる空間が形成され、SED体制に対して批判的な思想を発表することもできる場となった。そのため、「開かれた活動」は抑圧される立場にあった人々が自由に参加できる空間として重要なものであった。当時のユング・ゲマインデの参加者の一人は、この空間を「イエナで、人々が誰にも妨げられず出会うことのできる、唯一の空間(Raum)であった」と述べている。<sup>(45)</sup>

こうした「開かれた活動」に対しては体制側からの監視の目が向けられていた。東ドイツにおいて国家保安省が非公式協力者 (Inoffizieller Mitarbeiter: 以下IM) を通じて国民を監視していたことはよく知られているが、ユング・ゲマインデ内部にも当然ながらIMが入り込んでおり、そこからの報告がなされている。IMからの報告はユング・ゲマインデの主催者や参加者の来歴から、集会の規模、集会のテーマ等多岐にわたっている。このうち一九七二年にライナー・バースと呼ばれるIMによって、チューリッゲン地方の教会の若者運動に対するシリングの役割について報告がなされている。<sup>(46)</sup>

「シリングはルードルシュタット及び周辺地域で若者運動を指導している。彼の活動領域の中心はルードルシュタットの教会 (教会寮付) のユング・ゲマインデ並びにブラウンスドルフ (主に週末) である。シリングはより高位の教会関係者 (アイゼナハの監督) との関係を活用することが可能であり、非常に大きな影響範囲を獲得している。彼自身は広範にわたる知識、特に哲学及び政治的領域に関する非常に多様な知識を有している。彼の教会寮を通じて彼はチューリッゲン地方内にとどまらず、外部 (ナウムブルグ等) の多くのユング・ゲマインデとの関係を結ぶことに成功している。この関係は今日ルードルシュタットのユング・ゲマインデ及びそのメンバーの他のユング・ゲマインデへの訪問を通じて強化されている。その際にシリングは小さいながらも広範な仕事をしている。〔……〕シリングはチューリッゲン地方における若者運動の情報と組織の中心を發展させ続けている。特に彼はルードルシュタットとイエナに注目している。

ここでは特にコッホとアムラッハーとの定期的な交流関係を挙げる事ができる。彼は、彼を知るすべての人物から理想的であると見なされている。」

以上の報告から、先に述べてきたように、この地域の若者運動に対してシリングが大きな役割を果たし、各地のユンゲ・ゲマインデとの関係を結んでいること、この関係はユンゲ・ゲマインデのメンバーの訪問によって強化されていること、ルードルシュタットとイエナをチューリンゲン地方の若者運動の中心として強固なものとしていくことを試みていることがIMの報告を通じて体制側にも把握されていたことがわかる。

さらに、「開かれた活動」に対する体制側の評価は、次の一九七三年一月五日のSED郡指導部におけるこの地域でのグループ化についての報告からも読み取ることができる。<sup>(47)</sup>

「我々の地域において、好ましくないグループ化が若者の中でのみ存在している。特にブラウンスドルフ、ルードルシュタット、テーレンドルフ (Thalendorf) 、ツォイチュ (Zeutsch) 、バード・ブランケンブルク (Bad Blankenburg) においてである。このグループ化は、牧師のシュナイダー (Schneider) 、ギンター (Günther) 、メラー (Möller) 、ギルヴェルト (Girwert) 、シリング、そのほかブラウンスドルフで研修期間を終えた外部の牧師たちの指導の下で行われている。」

このように、ブラウンスドルフを中心とした若者のグループ化は体制側から好ましくないものとして捉えられていたことがわかる。

こうした状況下で、この地域における活動に対して圧力が加えられることとなった。その結果、体制側からの圧力に対して「開かれた活動」は活動を各地に拡散させ、それとともに内部に体制批判を明確に掲げる勢力を作り出すこととなっていく。

まず、一九七四年、地方教会監督のインゴ・ブレックライン (Ingo Bräcklein) から、ブラウンスドルフの教会施設の閉鎖勧告が出される事態が発生した。この施設の閉鎖勧告は建築上の問題を根拠としているのだが、この勧告に先立ち、郡の捜査が繰り返しておこなわれていた。そして、郡指導部から地方教会への苦情がだされている。この苦情を受けて、シリングに対して、ブラウンスドルフの施設の閉鎖とシリングの異動の勧告が出された。そして、一旦はブラウンスドルフの施設は閉鎖されるまでにいたった。しかし、措置に対する「開かれた活動」内からの反発が激化したため、一九七五年にこの閉鎖措置は解除されることになる。しかしながら、シリングは「開かれた活動」の運動を各地に拡散させることに努めるようになり、チューリンゲン地方以外の活動家との協力も重視するようになっていく。<sup>48</sup>

このような弾圧を、イエナの作家グループも受けることとなった。上述したように、このグループはイエナのノイローベダ地区において活動を行っていたのだが、その際使用していた施設が一九七五年に使用禁止処分を受けている。このことを契機として、この作家グループはユンゲ・ゲマインデの活動へとより接近することとなった。そして、ユンゲ・ゲマインデにおいて独自に開催されていた読書会を通じて体制批判グループを形成することとなり、一九七六年五月に最初の体制批判集会を開催している。<sup>49</sup>

この時期に、教会への圧力に抵抗する行動として社会に影響を及ぼしたのがオスカー・ブリューゼヴィッツ (Oskar Brüsewitz) の焼身自殺であった。ブリューゼヴィッツはゲラとライプツィヒの中間に位置するツァイツ (Zeitz) 地区において、若者の支援活動を行っていた。このブリューゼヴィッツが一九七六年に東ドイツ政府が教会に対して圧力を加えていることを批判するプラカードを掲げて焼身自殺するという事件が発生したのである。政府批判のプラカードの存在から、この自殺は体制批判運動としてみなされることとなった。東ドイツ政府はこれが政治問題化するのを恐れ、ブリューゼヴィッツを当初精神病患者であると公表した。しかし、これが教会側との意見の対立を生むこととなり、これ以降、特に教会組織の下部に所属する者たちはより積極的に体制批判活動を支援するようになるのであった。<sup>50</sup>

一九七六年には教会での運動に影響を与えるもう一つの事件が発生している。それが「ビーアマン事件」である。こ

れは、ヴォルフ・ビーアマンが西ドイツへと演奏旅行を行った際に市民権を剥奪され、そのまま国外追放処分となったものである。この処分に対して東ドイツの作家や芸術家等の知識人層が反対する署名活動を行った。上述のようにビーアマンはイエナを中心に教会の運動にも参加しており、運動の参加者からは多大な支持を集めていた。そのためビーアマンの国外追放は運動の体制批判的な側面をより強めることとなった。この署名活動は各地で展開されており、シリングなども署名に参加している。また、一九七六年一月一日にはアウエルバッハがシリングと協力して、ビーアマン追放措置に対する批判運動を目的とするユング・ゲマインデの集会を開催している。この集会に際してアウエルバッハは参加した若者たちを国家に反抗するように扇動していると見なされ、国家に敵対的な人物であると認定されている。<sup>(51)</sup>そして、この行動は直ちに鎮圧されてしまい、アウエルバッハは国外追放となってしまっている。しかしながら、これ以降のユング・ゲマインデの運動は政治的にも体制批判的な側面が強まることとなった。

以上のような経緯から、「開かれた活動」の外部に存在していたグループは体制からの圧力を受けた結果、「開かれた活動」へと参加し、内部に体制批判グループを形成するようになった。同時に、教会内部においても指導的な役割にあつた人物に対する弾圧に反発する形で体制批判的な傾向を強めていくことになる。「開かれた活動」内の運動は元々体制批判的要素を持っていたのだが、体制からの圧力によりそれがより顕著なものになったといえるであろう。

さらに、教会運動を取り巻く環境も変化することとなった。プリューゼヴィッツの焼身自殺以降、東ドイツ政府と教会指導部の間での協議が継続して行われており、一九七八年三月にSED書記長エーリッヒ・ホーネッカー(Erich Honecker)と教会指導者シェーンヘルとの間の直接会談が成立したのである。ホーネッカーはこの会談において、教会の日常活動を尊重し、「社会主義の中の教会」としての東ドイツ社会における教会の価値を認めた。一方で、教会指導部は東ドイツ政府の内政及び外交政策に同意することを公式に決定した。この一九七八年の決定は「偉大な歴史の実験」と呼ばれ東ドイツ国内における教会の地位を安定させるものとなった。<sup>(52)</sup>そして、教会内での活動が認められた結果、教会は体制批判運動の拠点としての価値をより高めることとなった。しかし、その一方で東ドイツの社会における組織として承認されることにより、政府からの指導に従う義務が生じることとなったのであった。

これまで見てきたように、教会指導部は体制に対して妥協的な姿勢を示すことがしばしばあったが、これ以降、より協調的な姿勢を示すようになる。一方で、教会内のヒエラルキーとして下部に位置していた各地方の教会は、依然として「開かれた活動」を通じて体制批判運動に協力的であり、教会内でも指導部と各地の地方教会との間の乖離は避けがたいものとなっていくことになった。

### 第三章 「開かれた活動」から「下からの教会」へ

一九七八年以降、教会における運動はその規模をさらに拡大させていくこととなった。「開かれた活動」は、一九七八年の段階では少なくともシュヴェリーン(Schweinin)、ベルリン、ドレスデン、ハレ(Halle)、ライプツィヒ、カール・マルクス・シュタット(Karl-Marx-Stadt、現ケムニッツ)、イエナ、ヴァイマル(Weimar)、ゲラ、アイゼナハ(Eisenach)、ゴータ(Gotha)、ザールフェルト、ルードルシュタット、ツェラーメーリスにおいて展開されており、チューリングゲン地方を中心に東ドイツ各地に拡散していた。そして、各都市の「開かれた活動」は互いに交流を通じてネットワークを形成していた。<sup>(53)</sup>

こうして形成されたネットワークを通じて開催されたのが、「June 78」及び「June 79」とよばれる若者の集会である。「June 78」はヴァルター・シリングとウーヴェ・コッホの主催で一九七八年六月三〇日から七月二日にかけて開催された大規模な若者の集会であった。参加者は少なくとも千人以上であり、東ドイツの各県から集まってきている。<sup>(54)</sup>この集会の開催の準備に当たり複数回の協議が行われている。郡指導部での報告によれば、この協議は教会評議会内で行われたが、その際責任者であるレマーツァール(Lammerzahl)牧師は不在のまま決定が為されたとされている。この一九七八年の集会では詩の朗読会、討論会、音楽集会、そして閉会にミサが行われている。ここで朗読された詩は、人々を圧力の下によって押さえつけることへの批判と独自の考えで独自の道を進むこと、国家保安省の活動への批判をその中心のテーマとしていた。また、討論会では「異なる人種、文化、国家との共存を台無しにするアパルトヘイトと人種差別

主義についての報告」と題して、アパルトヘイトの定義、マルティン・ルーサー・キング (Martin Luther-King) の言葉を引用しながら、東ドイツにおけるキリスト教徒の現状について討論が行われている。<sup>(55)</sup> この翌年、一九七九年にも同様の集会である「June 79」が開催されている。主催者は同じくシリングとコッホであり、一九七九年の六月二十九日から七月一日にかけて開催されている。プログラムも同様に音楽集会、朗読会、討論会からなっており、「June 79」における討論会の議題は「国際子ども年における若きキリスト教徒」であった。<sup>(56)</sup> 参加者はやはり東ドイツ各地から集まってきたおり、人数は二千人以上に増加していた。続く一九八〇年にも「June 80」が企画されていたのであるが、国家保安省からの圧力によって中止させられている。<sup>(57)</sup>

「June 78」「June 79」はそれまでの若者運動から大きく規模を拡大させており、全東ドイツから参加者が集まる集会であった。主催者であったシリングによると、この集会に参加した若者たちは、交流を通じて意見の合う仲間を獲得することが出来、これが一九八〇年代における平和運動や環境運動のひとつの基盤になっている。<sup>(58)</sup>

一九八〇年代に入ると教会の体制批判運動は東ドイツ各地で発生し、教会を通じて、発生した地域のみならず様々な地域で展開されることとなる。

一九八〇年一月九日から一九日にかけて、マグデブルク (Magdeburg) において「平和の十日間 (Friedensdekade)」と呼ばれる集会が行われた。これはこの地区の若手牧師たちにより主催されたものであった。当時はソ連のアフガニスタン侵攻や中距離弾道ミサイル配備をめぐるNATOの二重決定により冷戦構造が再び激化しようとしていた時期であり、この集会はこうした世界情勢に対する批判としても開始された。この集会は「武器無しでの平和の創造 (Friedenschaften ohne Waffen)」をモットーとしており、そのシンボルとして、「剣を鋤に打ちかえて (Schwerter zur Pflugscharen)」が提案された。これは実際に集会のシンボルとなり、翌年の「平和の十日間」において「剣を鋤に打ちかえて」のシンボルマークのワッペンが用意された。このワッペンは集会の参加者へ配布され若者を中心に東ドイツ全域へと広まることとなった。<sup>(59)</sup> これ以降、「剣を鋤に打ちかえて」は運動のシンボルと同時に、運動の名称そのものとなった。「平和の十日間」と「剣を鋤に打ちかえて」は東ドイツ各地で開催されており、「平和の十日間」はドレスデン、エアフルト、

ライプツィヒなどを中心に展開された。特にライプツィヒでは「平和への祈り (Friedens Gebet)」として定期的に開催されるようになり、これが一九八九年の秋の民主化運動の中心となった「月曜デモ」の基盤となった。<sup>(60)</sup>「剣を鋤に打ちかえて」の運動も同様に東ドイツ各地で展開されることとなった。特にイエナはこのときも運動の中心であり、政治的にも体制批判的な傾向をより強めていた。例えば一九八三年にはイエナ市街において「剣を鋤に打ちかえて」のデモ行進が開催された。ただ、この行進は開始した後すぐに解散させられてしまった。<sup>(61)</sup>

「剣を鋤に打ちかえて」は東西陣営の緊張の高まりに合わせて軍拡を進めていた東ドイツ政府に対する批判でもあった。一方東ドイツ政府の側も「東ドイツは剣も鋤も必要とする」というメッセージを出していた。<sup>(62)</sup>そのため、政府との摩擦を恐れた教会指導部は「剣を鋤に打ちかえて」のワッペンや標識を公の場で着用、あるいは掲げることを禁止した。<sup>(63)</sup>

一九八〇年代における代表的な平和運動としては、ロベルト・ハーヴェマンがライナー・エッペルマン (Rainer Eppelmann) と協力して発表した「ベルリン・アピール (Berliner Appel)」も挙げることができる。これはハーヴェマンとベルリンの「開かれた活動」の主催者の一人であったエッペルマンが共同で出した声明であり、正式には「東ドイツの対外政策、特に核兵器配備問題に関するベルリン・アピール」の名称で一九八二年一月二五日に発表されている。<sup>(64)</sup>

このときも教会のネットワークは用いられており、「ベルリン・アピール」発表に先立って、イエナにおいてユンゲ・ゲマインデが「軍備縮小のためのアピール」を発表している。上述のようにハーヴェマンはイエナの教会運動にも参加しており、密接な関係を有していた。さらに、ハーヴェマンはこのイエナでのアピールの発表に先立ちイエナの平和運動サークルとの協議を行っている。<sup>(65)</sup>ユンゲ・ゲマインデはイエナにおけるアピールを他の地域へと拡散させていくという姿勢を見せていたことから、一九八二年一月一二日に発表されるや、ただちに国家保安省から徹底的な弾圧を受け十名以上の逮捕者が出ることとなった。さらに、教会関係者からの逮捕者を増やしたくない教会指導部もこのアピールに干渉した。最終的に「ベルリン・アピール」の発表を境にイエナにおけるアピールは断念された。<sup>(66)</sup>

「ベルリン・アピール」はベルリンにおける教会の平和活動に関わっていた八十名が署名を行い、ここから、東ドイツ各地への署名活動が行われた。しかし、東ドイツ政府はこの運動が大規模化する前に教会指導部に圧力をかけたため、

エッペルマンは拘禁され、署名活動は抑え込まれた。それでも東ドイツ国内で、およそ二千人の署名が集まり、西ドイツへも波及したこの運動は大きな反響を呼ぶものであった。<sup>(67)</sup>

一九八〇年代前半に教会を拠点とした運動は、平和運動に限らず、環境問題、女性問題を巡っても展開されている。東ドイツの環境運動において、具体的な組織として成立したものにヴィッテンベルク教会研究所 (Die Kirchliche Forschungshem Wittenberg) が挙げられる。<sup>(68)</sup> 一九八〇年、「地球はまだ救うことができる——環境への脅威、キリスト教徒の信仰、行動の可能性 (Die Erde ist noch zu retten. Umweltbedrohung—Christlicher Glaube—Handlungsmöglichkeiten)」という報告がなされている。また、これに基づき、ハンス・ペーター・ゲンズイヘン (Hans-Peter Gensichen) が中心となって、移動用乗り物に自動車を使わない運動が展開されている。<sup>(69)</sup> こうした環境運動もまた東ドイツの各地で展開されており、一例としてザールフェルトにおいて、植林を行いながらの自転車行進が一九八一年に行われた。この行進はこの翌年も開催され、約千人が参加するものとなった。<sup>(70)</sup>

一方で教会を中心とした運動は女性解放運動においても展開されている。一九八二年人民議会において緊急時における女性に対する兵役義務に関する法改正の議決がなされ、これが女性運動展開の大きな呼び水となった。この法改正に反対して東ドイツ各地で「平和のための女性 (Frauen für den Frieden)」と呼ばれる運動が展開された。この運動においては、一九八二年一二月にホーネッカーに対して法案の撤回を求める署名が送られ、この翌年にはおよそ五百人規模の集会が東ベルリンで開催されている。この運動は平和運動とも連携して活動を展開した。また、この「平和のための女性」運動には、ロベルト・ハーヴェマンの妻であったカーチャ・ハーヴェマン (Katja Havemann) やハーヴェマンのもとで活動を行っていたベアベル・ボーライ (Barbel Bohley) 等が参加している。<sup>(71)</sup> 「平和のための女性」の運動においても「開かれた活動」が関わっており、「平和のための女性」の参加者達はユング・ゲマインデ等を通じて交流を行っていたとされている。<sup>(72)</sup>

一九八〇年代前半には東ドイツ各地の教会で平和・環境・女性運動が発生し、「開かれた活動」を通じて形成されたネットワークを基に東ドイツ各地で展開されるようになっていた。このとき展開された運動、特に平和運動については東ド

イツの対外的な主張からも直接的には否定されにくいものであり比較的大きな規模になった。しかしながら、これらの運動は地域的な拡がりを見せる段階において体制からだけでなく、体制との軋轢を懸念する教会指導部によっても圧力を受けることになる。こうした状況において、教会の下部および運動の参加者から教会指導部に対する不満が高まることとなつていったのである。

一九八〇年代後半に入ると上述してきた平和・環境・女性運動はそれぞれ独立した運動グループへと再形成されることとなる。たとえば、一九八六年には「平和と人権イニシアチブ」という独立グループが成立することとなる。このグループは先に述べた運動から主要なメンバーを引き継いでおり、その活動は多岐に渡っていた。「平和と人権イニシアチブ」は「グレンツファル (Grenzfall)」という名前の地下出版物(サミスター)を出版しており、東ベルリンを中心として情報提供活動を行った<sup>(22)</sup>。

環境運動の面では、一九八六年に「環境文庫」が東ベルリンのシオン教会に設立されている。この「環境文庫」は平和問題及び環境問題の専門文献の集積地であり、同時に独自の印刷・コピー機械を有していたことから地下出版物の印刷活動を行っていた。先に述べた「平和と人権イニシアチブ」の『グレンツファル』もまたこの「環境文庫」の所有する機材を利用して出版されていた<sup>(23)</sup>。

これらの運動はいずれも一九八〇年代前半の活動を引き継ぐものであった。しかし、一九八〇年代の後半に入ると、体制側からの圧力はさらに強まり、教会指導部もまた、平和運動やさらにはベルリンにおける「開かれた活動」を妨害するようになった<sup>(24)</sup>。そのため、教会組織内での運動が徐々に困難になっていった。このような理由から、新たな運動の中心が必要とされるようになっていたのである。

こうした状況下で「下からの教会大会 (Kirchentag von Unten)」が一九八七年六月にベルリンにおいて開催されることとなった。「下からの教会大会」の開催の準備にあたり、ベルリンのグループのみならずチューリゲン地方やライプツィヒ、グライフスヴァルト (Greifswald)、ハレなどから集まった運動グループが加わっている。この大会は教会の公式の大会と同時進行する形で開催されており、参加者にはヴァルター・シリリングも含まれていた<sup>(25)</sup>。シリリングはこの大

会に際して、「開かれた活動」の経緯、展開過程を踏まえた上で次のように述べている。<sup>(76)</sup>

「開かれた活動の第四段階において、七〇年代末に専門化が始まりました。全体的な社会の変革が重要なテーマとなったのです。(……)人々は専門化し、例えば平和運動を行い、あるいは重要な点で環境運動に取りくみました。あるいは人間の問題に貢献しました。なぜなら彼らは同性愛者であり、この社会に居場所を見いだせなかったためです。わたしはさらにもう一つ活動のテーマを挙げるができます。

それは、この開かれた活動を、第一にすべてを守る屋根とともに開始されたこの運動を、このように専門化した運動の段階へと届ける取り組みです。そしてこの下からの教会大会は、下から何らかの言葉を発することを試みるだけでなく、個々のグループが抱える異なる関心を共に引き受け、言葉にすることも試みています。

『我々は下からの教会として共に属している』

つまり、「開かれた活動」内で発生した運動が専門性を持ち、多様化するのに伴って「開かれた活動」自体も平和、環境、人権問題等に専門的に多様化した運動を支援できるよう変化しなければならぬことが訴えられているのである。

シリングの言葉の通り、「下からの教会大会」は、このとき同時に行われていた公式の教会大会において教会指導部への発言を行おうとしていた。しかしながらこのグループからの発言が認められることはなかった。このことによりデモ活動へと発展する騒動が発生した。最終的に教会指導部は「下からの教会」の活動を容認せざるをえなくなった。そして、その宗教観に関する監督者としてシリングが選ばれることとなった。こうして「下からの教会」が活動を開始することとなったのである。<sup>(77)</sup>

「下からの教会」はベルリンにおける「開かれた活動」の機能を受け継ぎ、ベルリンの運動グループの支援にあたることとなった。「環境文庫」が設置されていたシオン教会も「下からの教会」の監督下に置かれることになり、教会の指導部によって活動が妨げられることはほとんどなくなった。<sup>(78)</sup>さらに「下からの教会」は東ドイツ各地にも拡散し、ベルリ

ンを中心として各地の「開かれた活動」の運動を支援するものとなった。

一九八九年の転換期においても「下からの教会」は重要な役割を果たしている。一九八九年五月の地方議会選挙に際し、この選挙における大規模な票の操作が行われていたことが判明したことが体制批判運動激化のきっかけを作った。このときの票の集計は「下からの教会」の所有する空間において行われている<sup>79</sup>。また、一九八九年秋に誕生した運動グループのメンバーには「下からの教会」の参加者も含まれている他、「新フォーラム」の集会所を提供する等の支援を行っている<sup>80</sup>。また、各地の大規模なデモ活動に先立って各地の「開かれた活動」と協力して、討論会の開催を行うなど、デモ活動の支援も行っており、一九八九年秋からの転換期においてもなお、運動の基盤を提供する重要な役割を果たしている<sup>81</sup>。

以上のように一九八〇年代前半において、平和・環境・女性運動などの形で展開された運動は一九八〇年代後半には独立したグループの形成へと発展していった。しかしながら、この時期において、東ドイツ政府のみならず教会指導部もまたこうした運動を妨害するようになり、教会組織内で活動を続けることは困難になっていった。そのため教会組織から独立したグループの設立が必要とされ「下からの教会大会」を経て「下からの教会」が発足することとなった。「下からの教会」は「開かれた活動」の機能を受け継ぎながら東ドイツ各地へと拡散し、一九八九年に至るまで各地の運動を支援することとなったのである。

## おわりに

以上みてきたように、東ドイツの教会における「開かれた活動」は一九六〇年代末期に西側の文化に影響を受け、「プ  
ラハの春」弾圧への批判活動を経験した若者たちが自由に活動できる空間を提供するために、チューリンゲン地方のプ  
ラウンスドルフにおいて開始された。「開かれた活動」は一九七〇年代初期には、監視されながらも一定の活動を展開す  
ることができた。この間に一部の東ドイツの体制批判的な知識人との交流がなされ、後の活動の基盤が形成されること

になった。一九七〇年代中期に入るとシリングのブラウンスドルフの教会施設の一時閉鎖や、ビーアマンの国外追放など、こうした活動の中心的人物に対する弾圧が行われた。こうした指導的な人物への弾圧に応じて「開かれた活動」は各地に拡散し、同時に具体的な体制批判活動へと向かっていくこととなった。一九七八年のホーネッカーとシェーンヘルとの会談の結果、教会の社会的地位が確立され、教会内での行動が保障されるようになる、運動の規模はさらに拡大した。そして「開かれた活動」間の交流によって形成されたネットワークを基礎として、一九八〇年代前半には、平和・環境・女性運動などが各地で発生し、教会を通じて大規模に展開することが試みられるようになった。しかし、こうした運動は、地域間での連携が取られるようになる、体制側からの圧力により断念せざるを得なくなり、体制との摩擦を恐れる教会指導部からも妨害を受けるようになっていった。このような状況から教会指導部から距離を置いた運動の拠点となる組織が必要となり、「下からの教会」がベルリンで発足することとなった。「下からの教会」はベルリンにおける「開かれた活動」を引き継ぐと同時に、新たな運動の中心を形成し、各地の「開かれた活動」を支援した。一九八九年の転換期においても、体制批判運動が激化するきっかけとなった不正選挙の監視を支援するほか、このとき生まれた運動グループの活動の場所を提供し運動の基礎として重要な役割を担った。

このように「開かれた活動」は、一九六八年以降東ドイツ体制のイデオロギーとは異なる文化が自由に存在し得る空間を提供し続けてきていた。そして体制からの圧力に反応する形でその拠点をブラウンスドルフからイエナ、東ドイツ各地へと拡散させた。最終的にはベルリンにおいて、圧力を行使する側にまわった教会指導部から離れ、多様化した運動を支援する新たな拠点として「下からの教会」が組織され、ベルリンを中心とした「下からの教会」により再び東ドイツ各地の運動へと拡大していったのである。東ドイツの体制批判運動の展開過程は、「開かれた活動」の提供する空間へ多様な運動が集まり、拡大していく過程として一九六八年から一九八九年までの連続性を有していると理解することができる。以上のように、多様な価値観が自由に存在できる空間を提供する運動が歴史的な連続性をもって存在していたことは、個々の規模は比較的小規模であったとはいえ、多様な価値の共存が「全体主義国家」といわれる東ドイツにおいても確かに存在していたことを意味しているといえよう。

- (1) 東ドイツをナチスと同一視してしまう議論は東ドイツの「悪魔化」とも呼ばれる。東ドイツの「悪魔化」の議論とその警戒の必要性については Wolfgang Wippermann, *Dämonisierung durch Vergleich: DDR und Drittes Reich*, Berlin 2009 を参照。
- (2) 河合信晴氏は、余暇に対する体制側の介入の観点から東ドイツとナチスの差別化に言及している。河合信晴『政治がつむぎだす日常—東ドイツの余暇と「ふつうの人びと」—』現代書館、二〇一五年、二二二—二二三頁。
- (3) 一九八九年の運動に関しては主要なものとして以下の研究を参照。星乃治彦『東ドイツの興亡』青木書店、一九九一年・高橋進『歴史としてのドイツ統一』岩波書店、一九九九年・大塚昌克『体制崩壊の政治経済学』明石書店、二〇〇四年・Ehnhart Neubert, *Unsere Revolution: Die Geschichte der Jahre 1989/90*, München, 2008 (邦訳「エルハルト・ノイベルト著 山木一之訳『われらが革命—一九八九年から九〇年—ライプナツヒ・ベルリン』そしてドイツの統一』彩流社、二〇一〇年)；Irena Kukutz, *Chronik der Bürgerbewegung Neues Forum 1989-1990*, Berlin 2009。
- (4) Ehnhart Neubert, *Geschichte der Opposition in der DDR 1949-1989*, Bonn 1997. なお、東ドイツの体制批判運動には国内におけるSED体制への批判運動と、国外脱出による共産主義体制そのものへの批判運動とがある。両者の区分については河合信晴『ドイツ民主共和国における『反対派』の形成と展開(一)—『反対派』は『市民社会』の担い手か—』『成蹊大学法学政治学研究』第二五号、二〇〇一年、五一—七〇頁を参照。国外脱出運動も歴史的な背景を有し一九八九年の転換期において東ドイツ政府を揺さぶる要因となった。国外脱出運動については以下の研究を参照。青木國彦「東独出国運動の評価(一)ベルリンの壁解放の担い手についての謬論批判」『東京国際大学論叢』第四四号、二〇一一年、五七—七六頁・同「東独出国運動の評価(二)ベルリンの壁解放の担い手についての謬論批判」『東京国際大学論叢』第四五号、二〇一一年、一五—三四頁・同「東独イェーナの白いサークルによる沈黙円陣(一九八三年)：CSCEマドリード会議開幕を前に」『東京国際大学論叢』第五〇号、二〇一四年、一—三〇頁。
- (5) 山田徹『東ドイツ・体制崩壊の政治過程』日本評論社、一九九四年。
- (6) 市川ひろみ『東ドイツにおける教会と市民運動—社会主義の中の教会』の役割と限界—』『歴史評論』五四六号、一九九五年、四八—六三頁、八五頁。
- (7) 井関正久「東ドイツ体制批判運動再考—「六八年」と「八九年」の関係を中心に—』『国際政治』一五七号、二〇〇九年、七〇—八四頁。東ドイツの「六八年世代」については Dorothee Wierling, *Erzieher und Erzogene. Zu Generationsprofilen in der DDR der 60er Jahre*, in: Axel Schild/Detlef Siegrfried/Karl Christian Lammer(Hrsg.), *Dynamische Zeiten: die 60er Jahre in den beiden deutschen Gesellschaften*, S. 624-641, Hamburg 2000 を参照。

- (8) Neubert, a.a.O., S. 186(wie Anm. 4).
- (9) Anne Siebritz, Mythos „Offene Arbeit“: Studien zur kirchlichen Jugendarbeit in der DDR, Jena 2010.
- (10) Neubert, a.a.O., S. 686–690(wie Anm. 4).
- (11) Ebinda, S. 185.
- (12) Ehrhart Neubert/Thomas Auerbach, «Es kann anders werden»: Opposition und Widerstand in Thüringen, Köln 2005.
- (13) Henning Pietzsch, Jugend zwischen Kirche und Staat: Geschichte der kirchliche Jugendarbeit in Jena 1970–1989, Köln 2005.
- (14) 「開かれた活動」のネットワークは運動の参加者同士の個人的なネットワークを基としてなり東ドイツ全域に広がるようになった。それらのネットワークの体制批判運動なる重要性については Katharina Lenski/Reiner Merker, Zwischen Diktat und Diskurs: Oppositionelle Handlungsräume in Gera in der 80er Jahren, Erfurt 2006 を参照。
- (15) 東ドイツの体制批判運動の歴史に関する研究の主な参考文献として以下の参考文献を参照した。Ulrike Poppe/Rainer Eckert/Iko-Sacha Kowalczuk(Hrsg.), Zwischen Selbstbehauptung und Anpassung: Formen des Widerstand und der Opposition in der DDR, Berlin 1995; Udo Scheer, Vision und Wirklichkeit: Die Opposition in Jena in den siebziger und achtziger Jahren, Berlin 1999; Thüringer Archiv für Zeitgeschichte „Matthias Domaschk“(Hrsg.), Losgehen und Ankommen: Jugendkultur in der DDR Ende der 70er Jahren am Beispiel der Jugendgroßveranstaltung June 78/June 79 in Rudolstadt (künftig: Jugendkultur in der DDR), Jena 1999; Hans-Joachim Vein/Ulrich Mähler/Peter März/Daniela Frölich(Hrsg.), Wechselwirkungen Ost-West: Dissidenz Opposition und Zivilgesellschaft 1975–1989, Köln 2000; Detlev Pollack, Politischer Protest: Politisch alternative Gruppen in der DDR, Wiesbaden 2000; Heinrich Augst Winkler, Der lange Weg nach Westen, zweiter Band, München, 2000 (邦訳: H・A・マンンニニ著 後藤俊明 奥田隆男 中谷毅 野田昌吾監 『自由と統一の長い道のり』ローム・ランクス 1993) 『昭和堂』二〇〇八年); Katharina Lenski/Uwe Kulisch(Hrsg.), Zwischen Utopie und Resignation-vom Bleiben und Gehen: Jugendkultur in der DDR in den achtziger Jahren am Beispiel der Großveranstaltung „Jugend 86“ in Rudolstadt, Jena 2003; Uta Franke, Sand im Getriebe: Die Geschichte der Leipziger Oppositionsgruppe um Heinrich Saar 1977 bis 1983, Leipzig 2007; Leonore Ansoz/Bernd Gehrke/Thomas Klein/Danuta Kneipp(Hrsg.), «Das Land ist still-noch!»: Herrschaftswandel und politische Gegenschank in der DDR(1971–1989), Köln 2009; Detlev Brunner/Mario Niemann(Hrsg.), Die DDR-eine deutsche Geschichte: Wirkung und Wahrnehmung, Paderborn 2011; Eckhard Jesse, Systemwechsel in Deutschland: 1918/19–1933–1945/49–1989/90, Köln 2011.

- (16) 山田、前掲書、二二七頁。教会側は当初は政府の「成年式」に参加した者は教会の式典には参加させないといった方針を採っていたのだが、一九六〇年代前半には基本的に両方の式典に参加する事が容認されるようになっていった。
- (17) 市川、前掲論文、五〇頁。また、この時期の教会内部での議論の展開については、清水聡『ドイツ民主共和国と『社会主義ののたかの教会』—EKD分裂過程を中心に—』『西洋史学』二二四号、四三—六四頁が詳しい。
- (18) ジョン・W・グルーチャー著、松谷好明・松谷邦英訳『キリスト教と民主主義—現代政治神学入門—』新教出版社、二〇一〇年、二一七頁。
- (19) 市川、前掲論文、五一頁。
- (20) 河合信晴『ドイツ民主共和国における『反対派』の形成と展開(二・完)—『反対派』は『市民社会』の担い手か—』『成蹊大学法学政治学研究』第二十六号、二〇〇二年、二〇—二三頁。
- (21) ライプツィヒにおいて音楽活動を行っていたグループが曲名に英語を用いたことなどを理由に演奏許可証を剥奪された。後に反対デモが発生したがこのときは特別なシュプレヒコールや横断幕を掲げることはしていなかった。にもかかわらずこのデモ行進は警官隊に包囲されおよそ二百人の逮捕者が出ている。Wierling, a.O., S. 635.
- (22) 井関、前掲論文、七一頁。
- (23) この点について、ブルクホルト・クラインェルト (Burkhard Kleinert) は一九六五年一二月の中央委員会決定による反動から運動に参加したことを語っている。Wolfgang Engler, Die Ostdeutschen: Kunde von einem verlorenen Land, Berlin 1999, S. 308 f. ; ヴォルフガング・エンングラー著、岩崎稔、山本裕子訳『東ドイツのひとびと—失われた国の地誌学』未來社、二〇一〇年、三五—三三三頁。
- (24) Neubert/Auerbach, a.O., S. 91.
- (25) 井関、前掲論文、七二—七三頁。
- (26) Neubert/Auerbach, a.O., S. 93.
- (27) DIE OFFENE ARBEIT: Vortrag auf dem 1. Kirchentag von unten 1987 in Berlin, von Walter Schilling, in: Thüringer Archiv für Zeitgeschichte „Matthias Domaschk“ P-SA-K-05.17, Bl. 1. 及び DIE OFFENE ARBEIT 及び ThürAZ の表記。
- (28) Andreas Dornheim/Stephan Schmitzler (Hrsg.), Thüringen 1989/90 : Akteure des Umbruchs berichten, Erfurt 1995, S. 195—197.
- (29) Gerbergasse 18, Ausgabe 1, 2013, S. 4 f.

- (30) Dornheim/Schizler, a.a.O., S. 199.
- (31) Pietzsch, a.a.O., S. 11.
- (32) 井関‘前掲論文’七四頁。
- (33) 山田‘前掲書’二二七-二二八頁。市川‘前掲論文’五一頁。「社会主義の中の教会」とは「社会主義と無関係の教会でも、社会主義に反対する教会でもなく、社会主義社会における教会」とするシェーンヘルの言葉に由来する。
- (34) Gerbergasse, a.a.O., S. 10.
- (35) Pietzsch, a.a.O., S. 36 f.
- (36) Lenski/Merker, a.a.O., S. 32.
- (37) Neubert/Auerbach, a.a.O., S. 120-122.
- (38) Anne Siebritz, Gespräche zur Offenen Arbeit : Interviews mit Uwe Koch-Walter Schilling-Arnd Morgenroth-Wolfgang Thalmann-Thomas Auerbach, Jena 2010, S. 16.
- (39) Lenski/Merker, a.a.O., S. 31.
- (40) Neubert/Auerbach, a.a.O., S. 122.
- (41) Ebenda, S. 123.
- (42) Pietzsch, a.a.O., S. 75 f.
- (43) Engler, a.a.O., S. 310 : ‘ホンントー’前掲訳書’三五四頁。
- (44) 河合‘前掲’‘ユーン民主共和国における『反対派』の形成と展開 (一)’五八頁。
- (45) Thomas Grund, Biographisches Interview, in: ThürAZ, ZeZe-G-01.01, Bl. 3.
- (46) Pietzsch, a.a.O., S. 230 f.
- (47) Rat des Kreises Rudolstadt am 05. 01. 1973, in: Thürningisches Staatsarchiv Rudolstadt (フォルテ ThStA/Rudolstadt の索引), Kreisleitung der SED Rudolstadt Nr. 863, Bl. 2.
- (48) Neubert, a.a.O., S. 292 f. (wie Anm. 4).
- (49) Ebenda, S. 294.
- (50) Ebenda, S. 280-282.
- (51) Regierung der DDR Staatssekretariat für Kirchenfragen am 8. 12. 1976, in: ThStA/Rudolstadt, Bezirkstag und Rat des

Bezirktes Gera, Nr. 17396, Bl. 2.

- (52) 山田' 前掲書' 二二八頁。
- (53) Neubert, a.a.O., S. 295(wie Anm. 4).
- (54) Jugendkultur in der DDR, S. 42.
- (55) Rat des Kreises Rudolstadt am 05. 07. 1978, in: THStA/Rudolstadt, Bezirkstag und Rat des Bezirktes Gera Nr. 17313.
- (56) June 79, in: ThürAZ: P-TW-K-01.06.
- (57) Gerbergasse, a.a.O., S. 10.
- (58) Dornheim/Schitzler, a.a.O., S. 201 f.
- (59) Neubert, a.a.O., S. 398-400(wie Anm. 4).
- (60) Ebenda, S. 415 f.
- (61) Neubert/Auerbach, a.a.O., S. 158 f.
- (62) Neubert, a.a.O., S. 401(wie Anm. 4).
- (63) Ebenda, S. 402 f.
- (64) Neubert, a.a.O., S. 408 f.(wie Anm. 4).
- (65) Pietzsch, a.a.O., S. 181.
- (66) Neubert, a.a.O., S. 407(wie Anm. 4).
- (67) 河合' 前掲『レーニン民主共和国における『反対派』の形成と展開(二)』二八頁。
- (68) 同' 三二-三三頁。
- (69) Neubert/Auerbach, a.a.O., S. 175 f.
- (70) Neubert, a.a.O., S. 459-461(wie Anm. 4).
- (71) Pietzsch, a.a.O., S. 191 f.
- (72) Neubert, a.a.O., S. 597-600.
- (73) Ebenda, S. 629 f.
- (74) Ebenda, S. 578 f.
- (75) Ebenda, S. 685 f.

- (76) DIE OFFENE ARBEIT, a.a.O., Bl. 2.  
(77) Neubert, a.a.O., S. 686-689 (wie Ann. 4).  
(78) 東ドイツ政府からの圧力は依然として続けられており、一九八七年十一月には「環境文庫」に対して国家保安省の強制捜査が行われた。しかし、この捜査は失敗に終わり、逆に運動の知名度を高める結果となった。Neubert, a.a.O., S. 42-44 (wie Ann.3) : ノイベルト、前掲訳書、三六―三八頁。  
(79) 山田、前掲書、二六七頁。  
(80) Neubert, a.a.O., S. 859 (wie Ann. 4).  
(81) ornheim/Schitzler, a.a.O., S. 211-214.

【付記】 本稿は二〇一五年八月二六日、二七日に開催された九州政治研究者フォーラム（於・福岡県筑紫野市生涯学習センター）における拙報告原稿「東ドイツ体制批判運動の拡大―『開かれた活動』の展開を中心に―」に大幅な加筆修正を行ったものである。なお、このフォーラムに際して出席者の方々から多数の有益なご助言をいただいた。この場を借りて出席者の皆様に深く御礼申し上げます。